

# よかところ通信

2004年11月号

朝晩の冷え込みが激しくなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。

10月の半ばに稲刈り作業を終えた後、耕太と私は1ヶ月間ドイツに行ってきました。就農する前に3年半もドイツで環境や農村計画の勉強をした私たちは、農閑期になると現地調査や通訳・翻訳の仕事もしています。今回の訪問について耕太がコラムを書いたので、それを引用します。

(熊本日日新聞11月17日夕刊「今日の発言」より)

今ドイツに来ています。

今回訪れたのは、南ドイツに位置するホーエンローエ地方。城壁の残る古い都市と、畜産やワインを中心とした農村から成る地域です。なだらかな丘陵に畑がパッチワークのように広がる中、たくさんの取り組みが行われていました。

特産品の豚を学校に連れていって行く「食農教育」、地元のものにこだわった「地産地消」の直売所、農家民宿を中心とした「グリーンツーリズム」、景観保全サークルが主体の「ビオトープ」管理、婦人会による「地元案内人」、バイオマスなどの「新エネルギー」生産。これらの住民による取り組みが、地元農家の収入や新しい雇用に直接つながっていました。

個々の発想は、最近日本でも盛んに試みられているものと全く同じです。それもそのはず、ドイツの農業と農村を取り巻く状況は日本とそっくり。農産物価格の低迷、高齢化、世界競争、BSE(狂牛病)、流通業界のスキャンダル、不景気、失業問題、国や自治体の財政難...

そんな中、住民が自ら発案して新しいことに取り組むこの地域では、国が地元の地域運営組織を通して直接支援をしていました。ホーエンローエ地域の「運営」そのものが、国の「公共事業」として自治体以外の組織に任されたのです。これはドイツでも試験的に行われている新しい事業で、ホーエンローエのようなモデル地域が全国で十八箇所選ばれています。

自分たちの原風景やふるさとを守りたいという気持ちは、国境を越えて共通の思いでしょう。そのためには地域の自立が欠かせません。日本でも「地方財政改革」や「平成の大合併」など大きな流れの中で、本当に「地域の力」が試される時代が来ています。



コンバインの前で通訳をする愛梨



ドイツの牛たち

私たちの南阿蘇も魅力的な地域ですが、この魅力を残すためにはやるべきことがいっぱいあります。農業の話に交えて、南阿蘇の出来事も紹介していければ、と思っています。

師走に入ると急に忙しくなるものですが、皆さんお体にはどうぞお気をつけ下さい。